

もの言う牧師のエッセー 第261話 リオ・パラリンピック① 「堂々の旗手」

パラリンピック開会式。日本選手団の旗手として、車いすテニス女子の上地結衣選手がはじける笑顔で堂々の入場。兵庫県明石市出身の彼女は、先天性の潜在性二分脊椎症で足の感覚がまひし、幼少期は義肢装具で生活した。車いすテニスを始めたのは、小学5年の11歳の時。しかし最初は車いすに乗ることを嫌がり、同県車いすテニス協会前会長の中野秀和さんは「健常者と一緒のテニスをやりたかった」と振り返る。大人と練習する過程でスピードやパワーにも慣れ、負けん気の強さも手伝って一気に上達。14歳で国内ランキング1位。

彼女が在籍した明石商高の教頭だった伊藤雅弘さんによると、入学した際、1年生の教室は4階で、彼女への配慮から教室を階下に移そうとする案も浮上していたが、彼女は特別扱いを嫌い、自分で階段の手すりをつかんで上り下り、通学も電車とバスを使い自らでこなしたという。

いっぽう、千葉市の「オーエックスエンジニアリング」は競技用車いすを製造し、上地選手のようなテニスをはじめバスケットなどで活躍するアスリートたちを支えてきた。創業者の石井重行氏は、かつてバイク販売会社を経営していたが、バイクの試験走行中に転倒し下半身不随に。自分が車いすを使うようになり、一念発起して車いすメーカーに転身したが、資金繰りが悪化し、社員の給与も遅れがちになるなか諦めず改良を重ねてきた。つまり選手が活躍し始めると注文が増える。ついに必要とされる時代が来たのだ。そこにあるのは押し着せの美談の類ではなく、生々しい人生と、それを乗り越える勇気である。何のことはない健常者も障害者も区別なく困難に直面し試される。イエスは言う。

「起きよ、床を取りあげて家に帰れ。」マタイの福音書9章6節：口語訳、

と。確かにキリストは多くの人々癒したが、どんな障害や病気を持っていた人々に対しても徹底なまでに必ず“仕事”をさせる。癒した後、立ち上がらせ、身の回りのことを自分でさせる。堂々と生きて行くために。

2016-10-14

